

形を変える仕事

私の父親は、昔札幌市の平岸で時計屋をやっていました。住まいが2階にある小さな時計屋で、よく「子供は親父の背中を見て育つ」と言いますが、私の場合、片目にルーペをつけて背中を小さく丸めて、腕時計の修理をしている姿が親父の背中でした。そのせいか、私は未だに時計が好きで、居間に置いたり、掛けたりと、時計に取り囲まれていないと不安になる悲しい習性となってしまいました。

そんな時計屋も、時が経過し、腕時計自体よりもその周囲にあるアクセサリで売れる時代になりました。当時、カ○○アダイヤモンドチェーンのように黒い服を着た女性が売られるようになったため、修理や分解掃除をしてまで腕時計を使う人も少なくなり、せいぜい電池交換が関の山。最終的に店を畳むことになりました。

今や腕時計もApple Watchに代表されるように、スマートデバイスとして、生体情報など時を刻む用途以外が多くを占めるようになりました。このように時代によって、仕事は形を変えていくのだということを実体験から感じたところです。

さて、除雪車のオペレータは、現在運転手と助手の2名体制ですが、これも時が経過し、その形を変えつつあります。北海道開発局等が主体となり、産学官民の除雪に関するプラットフォームであるi-Snowでは、ロータリ除雪車のオペレータを運転手のみにするという省人化を目標に、作業装置の自動運転支援に向けた検討が行われています。また、北海道建設業協会が発行した『北海道の礎を創り、地域をまもり、未来を創る』によれば、2066年に国道12号で矢羽根や路肩に電波発信装置を埋め込み、それを基にロータリ除雪車が自動運転する姿が描かれています。その中で運転手は、除雪ステーションと除雪箇所との回送のみを行うことになっています。

時計屋にしても除雪車のオペレータにしてもそうですが、それが生活の一部であれば、その仕事の熟練技能はライフスタイルのシフトに応じて、形を変えながらも残っていくものと思います。熟練技能がAIに単純に置き換わるのではなく、AIを使いこなすことで新たな価値を生み出し、形を変えていく。ただし、この変化をスムーズに導くには、その仕事のボトルネックを見定めることが必要です。

なお、除雪に関しては、個人的には、更なる作業効率の向上のため、将来的にサービスとしての除雪作業に形を変え（SRaaS：Snow Removal as a Serviceとでも言いましょうか）、国などの行政機関が除雪車を保有しなくてよい時代がくるのではないかと考えています。除雪車を共有し、必要に応じて、デジタル及びAI化によって、国道、道道、市道をそれぞれの道路の用途に合わせて除雪する。テクノロジーの発展でそんな時代が来るようにしなければなりません。

その際には、寒地機械技術チームの研究成果が反映できていることを望む限りです。

(寒地機械技術チーム上席研究員 片野 浩司)

* * * *

表紙左上記号 ISSN 2432-2652の説明

国際的なコード番号である ISSN (International Standard Serial Number : 国際標準逐次刊行物番号)は、ISSN ネットワークが管理する、逐次刊行物を識別するための固有の番号です。この番号は国立国会図書館 ISSN 日本センターから付与されたものです。